

掲載者の声

育児日記

有賀 暁子

子供が生まれてあっという間に1年と数ヶ月が経った。つい最近生まれたと思っていたのにあっという間に大きくなった様を感じる。振り返ってみると赤ちゃんの時期はほんの一瞬だった！「毎日一緒にいてずっと見ているのにいつ背が伸びているんだ？」と、今まで当然のこの様に思っていたことさえ、子の著しい成長を目の当たりにし不思議な感動を感じる。

毎日が慌ただしく過ぎていく中で、子供が生まれたその日から毎日欠かさずしていることがある。それは育児日記を書くことだ。最初は些細なことを忘れないためのメモとして書き留めていたが、それが習慣となって毎日その日の子供の写真と様子を簡単な文章にして記録している。続けていてよかったと思うことは、「去年の今日はどうな感じだったかな？」と振り返った時に、案の定今となっては忘れていた些細な成長の様子がすぐに分かることだ。そこには、何気ない1日が笑いあり、涙ありのかけがえのない日であったことに気づかされる。

どうしても日々の育児の中で大変なことがあるけれど、過去の育児日記を見ることで「今のこの瞬間ももう二度と戻らないかけがえのない時」と冷静になり行動を改められる。とは言え、また時が経つと目の前のことに手一杯になってしまふのだが…とその繰り返しだ。

そうやって日々奮闘しながらも「幸せな大変さ」を経験できること、子の成長に寄り添えることがありがたい。

育児日記がいつまで続くのか分からないができる限り続け、未来の自分へのエールとして、将来の子供へのプレゼントとして書き送りたい。

(元NHKテレビ・ラジオ体操インストラクター)

サングラス

井口 昭久

若かった頃は、神経質そうな怖い面相をしていた。私を見た赤ん坊は必ず大声を上げて泣くのが常であった。

最近、往年の怖さがなくなって世間では私を只の老人としか見ていないらしい事件が続いた。車のドアが隣の車に触れたとやくざ風の男にいちやもんをつけられて1万円取られた。中年女性に些細な事故だったのに重大事故並みの保険金を請求された。

そのことを私の患者のAさんに話すと「なめられたんですよ。サングラスをかけなさい」という助言を受けた。

行きつけのスーパーの2階に眼鏡屋がある。店のお兄ちゃんに「一番怖そうなサングラスを頼む」といってヤクザに似合いそうな黒の細長のサングラスを作った。鏡を覗いてみると指名手配の犯人ようになった。自分でも身震いした。

スーパーですれ違う人は怖がるだろうと思ったから、車に乗っているときだけかけるようにしていた。

その日、通常的眼鏡に交換するのを忘れてサングラスをしたままクリーニング屋へ行った。途中で「やけに今日は暗い日だな」と思って気がついたが、面倒くさかったし、それにスーパーのおばさんの反応を試してみようと思ったのでそのままクリーニング店へ行った。

おばさんは私を一瞥すると黙って衣類を数え始めた。いつもとは異なる気配がカウンターの周辺に漂った。

無言のまま時間がたった。おばさんは奥から洗濯済みの衣類を持ってきても無言であった。明らかに怯えているように見えた。

私はサングラスを外して見ようかと思った。

しかしおばさんが、私がサングラスを外す前に何気なく言った一言が私をひどく落胆させた。

彼女は「目を悪くしたの？」と言ったのだった。

(名古屋大学名誉教授・愛知淑徳大学教授)



狩猟民の末裔・子孫として

伊藤 喜良

生まれ故郷の美和村（後に伊那里村と合併して長谷村となり、現伊那市長谷）に黒河内という集落が存在していましたが、そこは鎌倉時代初期には諏訪社の所領であったことが鎌倉幕府が編さんした「吾妻鏡」という書物に記されています。また藤沢（かつての藤沢村、後に高遠町と合併）も同じく諏訪社領であったことが同書から知られます。たぶん現在の高遠から東側の三峰川、藤沢川、山室川の流域の山稜地帯は、古代から諏訪社の所領であったと考えられます。またこの地域は南北朝時代には諏訪から下伊那大鹿村にかけて南朝方として活動した宗良（むねよし）親王の関係地でもあり、彼が諏訪や鹿などの動物を詠んだ和歌も多く存在しています。私はその山室川にそそぐ小河川の流れる非持山で生まれました。

この地域が諏訪社の所領であったのは諏訪社に贄（にえ）を奉納するためでありました。贄とは神に捧げる動物のことです。諏訪社の神様は狩猟民の神であったので、贄のために広大な狩猟の場が必要でした。東国の神社は西国と異なって狩猟をする人々の神様でありました。弓や馬等を上手くこなす東国の武士（団）は狩猟民が源流ではないかとの学説が存在しています。それゆえ野生動物を生活の糧としている東国には狩猟を推奨するための神社がかなり存在していますが、諏

訪社はその中のもっとも大きな神社でありました。動物を狩りで仕留めた時にその霊を弔い成仏することを神に祈ることが狩猟民の儀礼で、その一部を山の神に捧げ動物の霊を弔ったのでありました。それは「その動物が人に食べられることにより食べた人に同化し、その人が成仏すると、その動物も成仏する」というような祈りの呪文があり、それは野山で野垂れ死にするより人間に食べられる方がよいというような思想を持つものでありました。後の時代に「殺生禁断」思想が強くなると、諏訪社は鳥獣魚類の殺生を容認する「鹿食免」（中世ヨーロッパのキリスト教の免罪符に似ていますが）などという御札を発行したりしています。

私はそのような地域に生まれたので「狩猟民」・「山の民」の子孫・末裔であると思っています。そういえば、私が少年時代の集落には「鉄砲撃ち」がかなり存在しており、熊などを撃った人が、その獲物を家で皮を剥いているところを見に行った記憶があります。このような南アルプス北部の地域も、中世から近世へと時代を経るにしたがい農業を中心とする地域に転換していき、「殺生禁断」を旨とする仏教が広まって多くの寺院が建立されました。なお、狩猟民の活動は諏訪社領だけでなく、東国・奥羽の山地全般にみられ、成仏の儀礼をおこなっています。

さて、私が今住んでいます福島県の野生動物の殺生のことになりますが、現在多くの野生動物が「駆除」と称して殺されている地域があります。福島原発の爆発により居住できなくなった地域の野生動物です。人間の立ち入り禁止区域では野生動物、特に猪が爆発的に増えてしまい、ようやく居住することを許された場所にまで荒らしまわるようになったのです。困惑した住民は漁師がいないので罟等を仕掛けてたくさんの野生動物を生け捕りしています。そして「瓜ぼう」とも呼ばれている捕らわれた多くの小さな猪も、母親猪とともに殺害されてしまいます。その折、住民たちの中には目に涙を浮かべて手を合わせて祈る人もいます。ここでの動物殺害は諏訪社の神のよ

うな「食べるにより」霊を慰めるという思想はなく（放射線で食べることもできない）、ただ殺害するという行いではありますが、このような事態にいたった根本は、人間が原発をつくったという行為にいたります。福島には原発の汚染水（汚染水というなという人もいますが）を海に流すことの可否も残されています。

野生動物の活動は、人間が都市に集住するようになり、過疎化が進むと動物の動きが活発となり、動物のテリトリーが広がっていくのは自然です。私が生まれた非持山の生家も過疎化で「空き家」同然となり何年も訪れていませんが、生まれ故郷のよく遊んだ里山はほぼ自然にかえり、野生動物の住家になっているようです。住民の霊を慰めていたお寺さんも無住となっています。人間が電流が流れる中で生活するというように、動物と人間の共存は少子化の中で難しい課題を提起しています。



(福島大学名誉教授)

伊那市について感じていること

大西 洋

1) 自然環境

中央アルプス、南アルプスに囲まれ、素晴らしい景観など、四季の表情が多様性を感じる。

2) 四季の顔

年間 12 か月を通して花の美しさが県民に豊かさを与えている。

特に春先には高遠桜などさくら名所として魅力的。

3) 先進技術活用

ドローンをいち早く実験活用。物流機能の1つとしてドローンの活用。

市民にとっても将来の地方創生にとっても参考事例になる取り組み。

4) 産業

これから日本にとって大きな課題であり、ポテンシャルのある林業の推進。少量化、効率化、SDGS などへの可能性。



(写真撮影：大西 洋)

5) 市民サービス

市民用の交通システムの実用。

市民タクシー、ドローンなど、地方型 MAAS として、先進的な取り組みが素晴らしい。



(写真撮影：大西 洋)

6) 自治体のリーダーシップ



写真右端は白鳥 孝 伊那市長

(写真撮影：大西 洋)

市長の強いリーダーシップの基市民の豊かな生活を自治体が主体的に進めることにより、市民の安心、幸福への貢献度高い。

(日本空港ビルデング㈱取締役副社長執行役員)



師の恩

蟹澤 聰史

小中高と学んだ故郷を離れて67年も経った。今になって思い出されるのは、伊那の風景とともに先生方から学んだこと。国民学校三年までは「軍事教育」一辺倒だったが、8月15日を過ぎ、学校へ行くと、それまでとはがらりと変わった雰囲気になった。戦争に負けたことをどう思うかとの綴り方に「負けて悔しい。大きくなったらこの仇を取る」と書いたところ、そこだけ朱墨で消されて返ってきた。小さい頭は混乱し、どうしてだろうかと思悩んだ。朝から教科書の墨塗りが始まったのもこの頃だった。しかし、次第にこの戦争がたいへん無謀だったことが分かってきた。

先生方も価値観の変わり方にどう対処したらいいのか、たいへんだっただろうと今になって思う。『子供の科学』の古雑誌をご自宅から持ってきて子供たちに貸して下さった先生、自由研究と称して、自分たちの興味を持ったことを何でもさせてくれた先生、ある朝、学校に行くと突然いなくなってしまった先生、後でレッド・パーズで失職されたとのことなど、いろいろあった。

中学に入ると、もう中学生なのだからと、私語を禁止され、日常生活を通して「三平方の定理」を教え、黒板いっぱいこれが「ピタゴラスの定理」の証明だと見事に教えて下さった先生、理科室のいろんな道具や薬品を自由に使わせて下さって、フェノルフタレインで魔法のように水の色を変えてみせた先生、杉田玄白『蘭学事始』や「寅彦の随筆」の面白さを教えて下さった先生。

高校に入り、八キロの道を自転車で通ったこと、

クラス担任は国語の先生で、ソ連抑留の苦しさを味わってこられた。教科書だけではなく、吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』や齊藤茂吉『万葉秀歌』などの面白さを教えて下さった。クラス対抗の駅伝は盛り上がった。今になっていえる話だが、三年生のときは禁断の酒を持ち込んで先生に謹呈し、何とお零れにも預かった。そんな雰囲気がとても有難かったと今では思う。

どの先生方からも「好奇心と想像力」の大切さを教わった。

(東北大学名誉教授)

「いま、伊那市出身アーティストがアツイ！」

上岡実弥子

……らしいですね。

わたくし、まったく存じませんでした。

きっかけは幼なじみ:チハルさんからのLINE。

チ「そういえば King Gnu の井口くん……」

私「ごめん誰だっけ？」

チ「あら？ King Gnu といえば伊那出身のグループよ」

私「し、知らなかった」

チ「聴いてみて〜。伊那では King Gnu チョー有名人よ」

<原文ママ、一部抜粋>

昔からチハルさんは流行に敏感⇔私は鈍感。『三つ子の魂百まで』とはいうものの伊那出身者としてウカツであった！

すぐ YouTube で聴くと……素敵。しかも聴いたことがある。かなりメジャーなグループだったのでですね。

調べると、ツインボーカルお2人とも伊那市ご出身とか。

「今ごろ何言ってるの」「モグリ」と叱られそうですがお許しください。今後、コトあるごとに自慢します(笑)。

本稿タイトル「いま、伊那市出身アーティストがアツイ！」は、以前、伊那市役所に掲示された

パネルの文言だそうです。ネット上でも「なぜ伊那市が?」「伊那市にはアーティストが育つ土壤がある?」と話題になったとか。

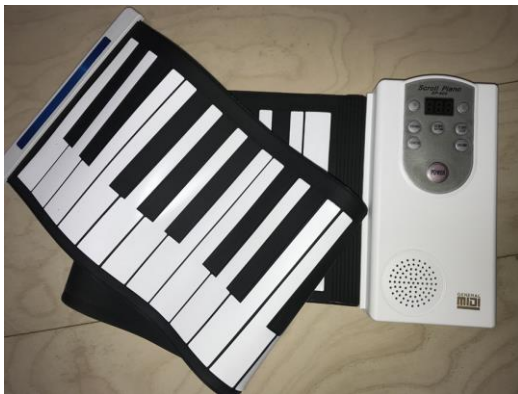
思い返すと。伊那にいた頃は、好きなように歌ったり楽器を弾いていました。

私の生家は、周りが田んぼか畑。ピアノ、ギター、三味線等をかき鳴らしてもご近所からクレームを受けたことはありません。

いま住んでいるマンションは、時折「大音量の音楽や楽器の演奏はお控えください」と警告があります。楽器を弾くのに有料のスタジオを借りるなんてよくある話。“音”を“楽”しむにはだいぶ窮屈です。

誰にも気兼ねなく、思いきり歌える・弾ける……そんなのびのびとした環境が伊那発アーティストの土壤になっているのかもなあと嬉しく思いつながら、私は久々にロールピアノを引っ張り出し奏でてみました。もちろん、音量はミニマムで(苦笑)。

(株式会社キャラウィット代表取締役)



遠い伊那の景色

神沼 靖子

伊那を離れて60年あまり、もう80才を越えました。この間に多くの人に出会って、いろいろなことを学びました。Take and Giveの日々でした。思い出すのは遠い昔の景色ばかりです。一時間あまりかけて通った小学校への往復路は、冬になると身長を越えて雪のトンネルになっていました。それはそれで、楽しい思い出になっています。

我が家は一軒家でしたので、自然を相手に野山で遊ぶことが多かったのです。今はどうなっているのかしらと、勝手に想像しています。

春から秋にかけての自然は多様に変化していることでしょう。

話は変わりますが、昭和31年の3月に弥生ヶ丘高校を卒業した私は、東京理科大学の数学科に入学するために上京しました。4年後に卒業し、企業に2年間ほど勤務したあと横浜国立大学工学部の助手として6年間余りを過ごしました。

その後、帝京技術科学大学の助教授、前橋工科大学の工学部教授、などを歴任して、定年を迎えました。

現在も所属している学会として、情報処理学会、情報システム学会、数学会、応用数理学会、応用統計学会、経営情報学会、AIS、ACM などがあります。これらは学びの場です。

社会活動としては、高専プログラムコンテストなどがあります。執筆活動としては、「情報システムの計画と設計(培風館)」「基礎情報システム論(共立出版)」「情報システム基礎(オーム社)」「プロジェクトの概念(近代科学者)」など30冊を越えました。そして現在は、読書に明け暮れる日々を過ごしています。

(元大学教授)

公益財団法人煎茶道方円流

唐沢

温園おんえん
(温美)あつみ

煎茶道方円流の長野県支部長の唐沢でございます。

煎茶道とは、玉露、煎茶、番茶、紅茶、ウーロン茶、香煎などの多種類のお茶をお手前を通して総合芸術、美術を学ぶことができる楽しいものです。床の間の掛軸、お花、道具など陶芸の色々と、楽しみが広がって、年令ごとに味わいも深くなる道です。

今から約三百六十五年前、中国の明王朝時代の末頃に高僧しん元げん禅師ぜんしの来朝とともに当時のさまざまな文化とともに伝えられたものです。四代將軍 徳川家綱公の支援により、宇治の地にあまの黄檗山萬福寺を隠元禅師により開山されました。

江戸時代は文人、医師が特に好まれ茶の湯とともに男性が主流でした。明治時代以降は女性が多く楽しめる煎茶道となり、礼法、作法化され、より広く風雅な意味合いとともに伝えられてきました。

この度、妹の川村利美が「ふるさとだより」に邦楽にたずさわっていることで「日本の音を未来に伝えたい」と希望しているように、私どもの煎

茶道も、日本人の身近なお茶を煎茶文化とともに多くの人々に伝え、ご理解いただけますようにと。私は、伊那市に生まれ育って伊那市に暮らして七十年以上になります。学生時代に京都で出会った方円流を帰省してすぐ、昭和四十三年よりお稽古場をもち、五十年以上となりました。

翌年の昭和四十四年に、初めて煎茶会を伊那市の長桂寺でいたし、その後は毎年の様に常圓寺にて方円流のお茶会を開催してまいりました。伊那市のふれあい広場でのお茶席、毎年の様に夏にはいなっせビルにてのお茶席などのイベント、伊那県文化会館の開館の当時から「邦楽サラダコンサート」の協賛茶席、支部の結成十周年記念の年からのチャリティーバザーには収益金などを伊那市に何回か寄付させていただきました。

五十年の年月は長野県各地に会員が多くなり、長野市の善光寺でのお茶会、松本市の国宝松本城本丸庭園茶会、諏訪大社でのお茶会、軽井沢プリンスホテルのお茶会、飯田創造館のお茶会など各地のお寺やホテルなどの多くのお茶会をいたして参りました。海外茶会も、平成の時代は十二年間毎年の様に実行いたしました。この二年間はコロナ感染ですべての行事が中止となりましたが、ふたたび皆様様と楽しめる日を待ち望んでおります。

私たちの日常生活に身近な煎茶を、より多くの方々にお伝えし楽しんでいただける日を夢んでいます。未来ある若い方々、小学生、中学生、高校生にもお伝えできる機会ができる日を希望しています。

(方円流煎茶道教授)



「ふるさと」

北原 巖男

ふるさと伊那市を離れ東京暮らしが続く僕の愛読書の一つは、毎月届く「市報いな」。ふるさと伊那市が、伊那市の皆さんが、宅配便で自宅にやって来てくれるそのものなのです。

30 ページほどの広報誌一枚一枚に、「こんなことも行われているんだ。凄いなあ」「へえー、面白そうだなあ」「これは大変だ。みんな頑張ってください」等々、いつもさまざまな発見や出会いに興奮。ふるさと伊那市そしてふるさとの皆さんへ、勝手な思いや激励をあれこれ馳せています。

こうした、ふるさとそしてふるさとの皆さんとの一体感に浸れるささやかな幸せなひと時は、おそらく僕だけのものでないと思います。伊那市を遠く離れて「市報いな」を手にされている皆さんも、きっと同じような気持ちを抱きながらご覧になっているのではないのでしょうか。

本年令和4年は、運気が最強とも言われる36年に一度の「五黄の寅年」。

ふるさと伊那市民の皆さん一人ひとりに、そして誰一人取り残すことなく光を届けるため市民の皆さんの先頭に立って市政運営に全力を尽くしている白鳥 孝市長はじめ伊那市役所の皆さんに、また、そんな伊那市に政策提言できる議会を目指している飯島 進議長をはじめ伊那市議会の皆さんに、心から力いっぱいのエールをお送りいたします！

今年こそ BEAT COVID-19！

そして前へ！

僕には「市報いな」と共に楽しみにしていることがあります。それは、『市報いな』をお届けします」と記された一枚紙の中に、毎回さりげなく書かれている担当の方の短いエッセー。正にもう一つの「伊那市ふるさとだより」を実感します。

こんな記述もありました。「市役所の庁舎からは天竜川や三峰川が増水する様子が見え、増水している時は安全な水位だと分かっているけども「怖い」

と感じることがあります。もしかしたら、この「怖い」という感覚が防災に繋がるのかも知れません」

日課とされている真冬の早朝ウォーキング時の空についても。「早朝 5 時少し前。今朝は満天の星空でした。伊那に生まれ育った私でも、思わず空を見上げたくなるほどの迫力ある美しさ。街灯の少ない暗闇に移動してしばらく星空を堪能していると、おおぐま座のしっぽ辺りに流れ星が流れました。一瞬のことなので、見間違えか錯覚かも知れないと思っているとさらに追加でもう一つ。今日はきっと良いことがあると、気分良く出勤できたことが、どうやら今日一番良いことだったようです」

YES、僕のふるさとは伊那市！

(日本東ティモール協会会長)



伊那グリーン

幸島 宏邦

伊那市の皆さま、伸和コントロールズの幸島と申します。この度、2021年に仰せつかりました伊那市特命大使といたしまして、伊那市への想いをつづります。

弊社は本社を神奈川県川崎市に置き、伊那市にある長野事業所（高遠工場・アルプス伊那工場）において、ものづくりを行っている企業です。長野事業所では、医療業界で活用される電磁弁、そして現在私たちの生活を豊かにしている半導体業界で活用される精密温調装置といった製品の、開発・生産・販売を行っています。また、弊社は1984年からこの伊那市において活動していますが、「地域との共生を図り、地域社会の経済文化の発展に貢献する企業となる。」という経営理念に基づき、地域の皆さまとのかかわりを心から大切にしてきました。

私が、ここ伊那市を拠点にすることを決めたいきっかけは、何と言ってもこの、みどり豊かな大自然であります。1984年の拠点開設に際して立った

信州杖突峠「峠の茶屋」から眺めた景色、それは私の目と心に感動を与えてくれました。そして、伊那市の素晴らしい自然、環境の中で活動することで、この場所を大切にしたいという思いは絶えることなく、今でも高まり続けています。

今、世界中で問題視されている地球環境問題、そして子供までもが未来を見据えて取り組むSDGs（持続可能な開発目標）は、当社の経営においても重要な位置づけとしています。本業では環境負荷を考慮した製品開発に取り組み、責任のあるものづくりを推進しています。そして、SDGs未来都市である伊那市とのパートナーシップにおいては、「伊那市50年の森林(もり)ビジョン」に賛同し、伊那市の自然をより豊かにし、未来につながるため、当社も共に実行していきます。

今も変わらず感動と安らぎを与えてくれる大自然と美しき心があふれる伊那市に感謝し、未来に「伊那グリーン」という価値を残し世界に伝えていくことが、今の私のひとつの「夢」であります。

(伸和コントロールズ株式会社 代表取締役会長)



小さな農家

白井 温紀

一昨年の夏、札幌の人気レストランで料理長をしていたシェフが新しく仕事仲間に加わり、以来フルコースディナーを年に数回提供している。地元の食材とわが牧場のチーズを組み合わせ、華やかなワインを添えて。

秋も深まったある日、ジビエが主役の料理に合わせ、ワイン店が選んだナチュラルワインが供された。飲んだことのない複雑な味で、言葉を失くした。急遽、そのワインを世話して下さった若き建築家ご夫妻をお招きすることに。

奥様はワイン店主で、ワインの説明をするとき「この人は…」と言う。生産者の生き方を真摯に

伝えようとしているのだ。「この人たちは、生き方としてワインづくりを選び、ワインを通して人や自然と向き合っているのです。」小さな農家が葡萄栽培から醸造まで手がけたと知り、遠い国のワインに初めて親しみを覚えた。

その中で印象に残ったのが、マスカットを原料としたフランスワイン。たくさんの香りが層をなし、葡萄畑の風景が現れては消える。奥様曰く「これはレモングラスや山椒のニュアンスも。原料は葡萄だけなのに、不思議ですよ」。

多くの葡萄畑は農薬を使い、除草剤をまく。一定の品質に近づけるため、さまざまな工程を経て「うちの味」となる。一方で、ナチュラルワインは畑で九割の仕事が終わるといふ。農薬はまず使わない。健全な葡萄をつくるために。葡萄がすべて。酵母も畑や蔵に棲む野生のものを活かし、ひたすら原始的なやり方を貫く。美味しいから。

北海道でわが家は農家になった。農家が、人や自然に大きな影響を与えていると知る。牛は繊細で可愛いことも知った。大切なもの、ことを、守らなければ。自然に敬意を払ってつくられたワインが、異国の小さな農家を身近な存在にしてくれた。私は牧場で働きながら、人と庭と自然について考える。札幌から来たシェフは毎日搾乳し料理もしている。小さな農家の時代が来るのかもしれない。

(ガーデンデザイナー)



ワインもいいけれど、
私たちは美味しい
草が好き



伊那市の千年村、福地郷の歴史を探る

田畑 貞壽

千年村の調査研究をすすめてきた「千年村プロジェクト」の活動拠点と活動メンバー中谷礼仁研究室（早稲田大学創造理工学部 建築学科）・木下剛研究室（千葉大学大学院園芸学研究院 ランドスケープ・経済学 環境造園デザインコース）の調査研究グループにより2015年に全国の千年村の地図化の作業が進み、関係学会などをはじめ関係自治体や住民集落旧部落などで報告会が実施されました。その報告会が長野県伊那市で2021年の4月に現地にも木下剛先生と信州大農学部上原三知先生と研究室関係大学院生で千年村福地郷現在の長野県伊那市富県北福地・南福地の調査が始まりました。

縄文・弥生時代から今日まで続く稲作文化が創り出した集落は。度重なる自然災害や公災害にainaながら今日まで集落（部落）は健全です。これからもなお一層コミュニティ市民の参加と行政、専門家、政策家、NPO法人の協働プロジェクトの推進が必要とされています。

新たな「伊那市千年村の会仮称」福地集落を参考に5月中旬と8月下旬に、信大、早稲田大千葉大学生と野外調査と研修会を開催予定と聞いています。詳細については、関係大学の研究室お問い合わせください。なお、図1. 2. 3は、木下剛先生より提供。

図1 全国の千年村



千年村とは（千年村の案内資料より）
〈千年村〉とは、千年を基準として、自然的社会

的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が存続してきた土地をさします。

様々な変容を受け入れつつ、長い存続の歴史を持ちつづけてきた土地には、生存にまつわる仕組みがすでに育まれているはず。 (2021. 10. 21 一部語句を改訂)

図2 本州の千年村



図3 伊那谷の千年村



千年村プロジェクトの目的

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉の収集、調査、公開、認証、交流のためのプラットフォームとして構想されました。2011年に発生した東日本大震災後に、優れた生存立地を発見しその特性を見出す必要性を感じたことが発端です。関東と関西に研究拠点をもち、環境・地域経営・交通・集落構造という4つの場所の要素を重要視し、それらに関する諸分野の研究者・実務者らによって運営されています。

千年村プロジェクトの方法

長期にわたって持続してきた優れた生存立地

を客観的に見出すにはどのようにすればよいのでしょうか。そのような立地は必ずしも有名ではなく、むしろ人知れず続いてきたのかもしれない。私たちプロジェクトはそのような普通に優れた立地を探すために以下の客観的な発見方法と評価手法を確立しました。

1. 古代地名による候補地の収集

日本では、1000年以上も前の古文書の中に多数の地名が記載されています。たとえば平安時代の辞書『和名類聚抄』には約4000もの郷名が記載されています。千年村プロジェクトでは、これまで地名学者らによって明らかにされた比定地の中から、具体的な場所が特定できる1977件の場所を2015年に地図上にプロットして公開しました。これらを千年村候補地として位置づけました。また別の古文書を用いて、さらにプロット作業は続けられています(2016年に北海道と沖縄を追加)。この作業によって、従来の活動とは比較にならない多数の候補地の存在を明らかにしました。

さらに、この候補地のデータベースが呼び水となって、多くの方々から新たな〈千年村〉の報告や訂正報告がもたらされることを期待しています。

2. 千年村プロジェクトによる千年村候補地への訪問と調査

千年村プロジェクトはこれら候補地のデータベースをもとに、自主的に実際に現地におもむいています。環境・地域経営・交通・集落構造の各分野にもとづいたその持続要因の分析と、その地域の性格を調査しています。そしてその地域が良好な生存条件を保っていることを確認した場合には、その地を〈千年村〉として認証しています。その際に得られた知見は、優れた立地一般の条件として同プロジェクトの学的成果として蓄積されています。

3. チェックリストの公開

千年村プロジェクトはその蓄積から、立地一般を評価する際の千年村チェックリストを作成しました。このチェックリストを使って、多くの方々が自らが生活する場所の特性を知ることが

できるでしょう。

4. 依頼に基づく認証作業

このチェックリストを記入し、千年村プロジェクトに提出することで、どなたでも千年村認証を依頼することが可能です(プロジェクトによる認証作業にかかわる費用と認証後の運営費が発生します)。

5. 認証千年村の特典

千年村プロジェクトによって認証された〈千年村〉(=認証千年村)は、以下の特典が付与されます。

千年村プロジェクトからの千年村認定証

千年村プロジェクトホームページにおける認証千年村としての紹介

同ホームページ内、千年村マップにおける認証千年村の位置表示と概要紹介

認証地域の持続に寄与する公共活動に対する認証千年村の名称、千年村プロジェクトのロゴマークの使用

6. 〈千年村〉の応援

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉が相互に交流、知識の交換を行いうる場の確立をめざします。また、その持続的地域づくりの提案、活動に参画します。

千年村プロジェクトの活動拠点の紹介ならびに活動メンバー

関東研究拠点

早稲田大学創造理工学部 建築学科・中谷礼仁研究室

〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 55N-8F-09

千葉大学大学院園芸学研究科 緑地環境学コース・木下剛研究室

〒271-8510 千葉県松戸市松戸 648 A 棟 3 階 301

(千葉大学名誉教授・前日本自然保護協会理事長)



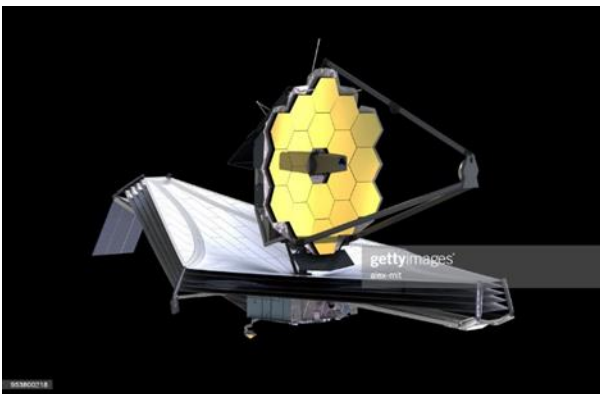
コロナ禍による閉塞感を打破する 壮大な計画

辻 孝夫

皆様、新年あけましておめでとう御座います。一段落しかけた新型コロナウイルス感染ですが、年明けからオミクロン変異株による感染が急拡大し、先行きが益々不透明となっています。

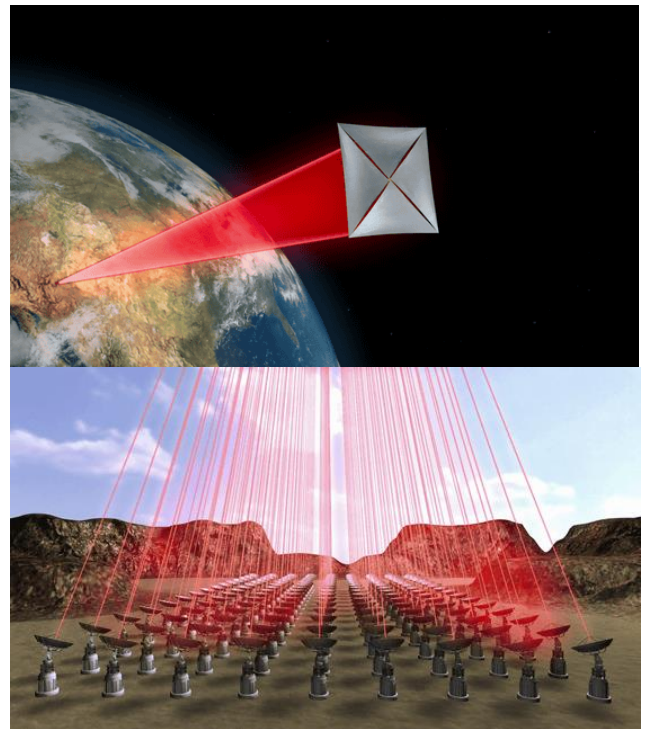
新型コロナに翻弄され沈み込んだ過去 2 年間の新状態（ニューノーマル）でしたが、新春を迎え明るく前向きに 2022 年を過ごす為に壮大な夢のある話をさせていただきます。

NASA は太陽系外の地球サイズの惑星を発見する為に 2009 年 3 月にケプラー宇宙望遠鏡を打上げ、9 年半で約 53 万個の恒星を観測し 2,662 個の系外惑星を発見しました。昨年 12 月 25 日、長年遅延に遅延を重ねた宇宙望遠鏡ジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡が打上げられました。NASA、ESA（欧州）及び CSA（カナダ）の共同プロジェクトですが総額 1 兆円を超える巨大な宇宙望遠鏡です。この望遠鏡は地球から太陽の逆方向約 150 万 Km 彼方の L2 ポイントと呼ばれる軌道に投入されます。6.5m の巨大な反射鏡及び各種最新鋭の観測機器により宇宙創成後の一番星（1st Star）や最初の銀河を発見出来るのではないかと期待されています。更に太陽系外惑星の観測も想定されています。



昨年 2 月、論文誌「ネイチャー・コミュニケーションズ」により、4.37 光年先にあるケンタウル

座 α 星系（A, B, C の恒星群）の C 星にはハビタブルゾーン（水存在圏）に地球の 6~7 倍の大きさの惑星が存在している可能性が発表されました。近い将来、上述のジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡により、ハビタブルゾーンの太陽系外惑星と水の存在が確認されるかも知れません。これが確認されると、NASA の将来プロジェクトの一つとして計画されている「ブレークスルー・スターショット」構想が実現するかも知れません。これは非常に薄い膜を持った超軽量な探査機ですが、地上から強力なレーザービームを照射し機体を光速の 20% まで加速させ、太陽系外惑星を探索す



るという構想です。

NASA によると 2069 年の計画の様ですが、ケンタウルス座に到達するのに約 20 年かかり、映像等の観測情報を送信し地球で受信するには更に 4.37 年必要です。とてもそこまでは長生き出来ませんが、地球外生命体の存在が確認される可能性があると思うとワクワクしますね。

“Imagination is more important than knowledge”
(知識よりも想像がより重要)

20 世紀最高の宇宙物理学者アルベルト・アインシュタインの言葉です。

(株式会社 JVC ケンウッド特別顧問)

三峰川の流れと「あばれ天竜」

中村 三郎

遠くがよく見えるから「高遠」という地名の由来、ということを知ったことがある。確かに高遠の街から東西を眺めると、はるか東方に南アルプスの仙丈ヶ岳、西方に中央アルプスの山々を眺望出来る。伊那節の一節「東仙丈・西駒ヶ岳、間を流れる天龍川・・・」は伊那谷の優れた風情をよく表現してくれている。

ところがこの天龍川はかつて「あばれ天竜」の異名をもつと知られており、しかもその元凶が「三峰川」であったと知って驚いた。この三峰川は南アルプスの多数の河流を集めて流下し、高遠と扇頂部とする大規模な扇状地をつくりつつ天竜川に合流し、天竜川氾濫の元凶となっていたという。

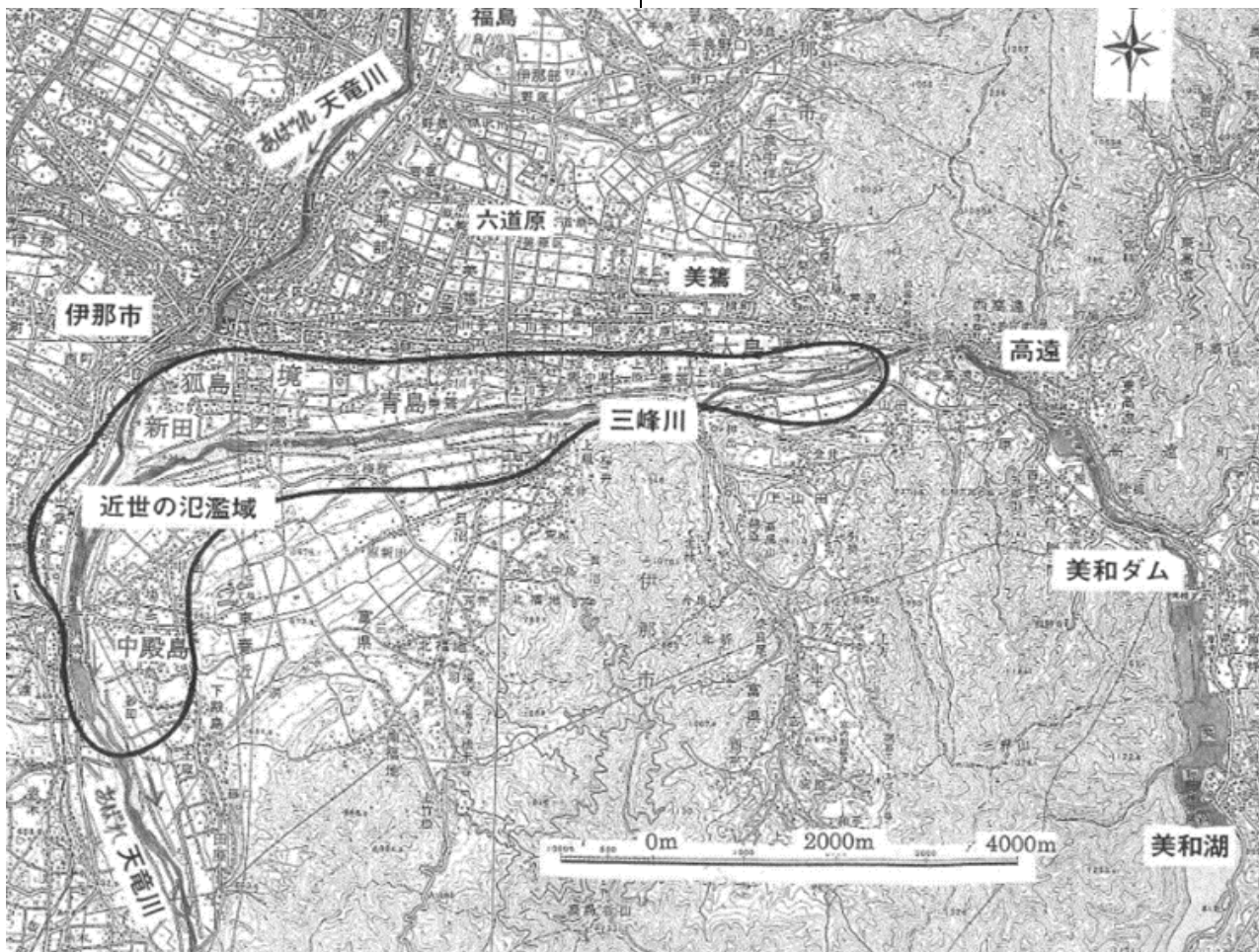
この三峰川について、上伊那誌（1963）によると、1658年以来1865年まで210年の間に15回もの大洪水・大満水が記録されてい

る。また明治2年（1869）以降昭和32年（1957）の間には24回もの大洪水や満水が発生し、この三峰川の洪水は「あばれ天竜」の元凶となっていた。しかし昭和32年（1957）直後、当時の建設省・県庁・地域の人々のご指導とご協力により、高遠町南東の「美和」地区三峰川流域に「美和ダム」が構築された。それ以来三峰川の流れが安定したことにより、「あばれ天竜」のイメージが消え今日に至っている。

三峰川扇状地面の各所には「島」とか「新田」という名のつく集落名が多く見られる。これはかつて三峰川の氾濫・奔流によって運ばれた砂・礫が堆積したといわれる「砂堆域」が形成され、その後そこに集落が出来、その集落名の末尾に「島」・「新田」等の名がつけられ、いわば居住する土地の「性格」や「由来」を示す名称とも考えられ興味深い。

（防衛大学校名誉教授）

付図「三峰川扇状地と美和ダム」



珍談と奇談各一話

中村 彰彦

今回は戸板康二の名エッセイ集『ちよつとい話』の響ひびみに倣ならい、年明けに知った珍談と奇談をひとつずつ披露して責めを蓋ふたぐ。

そのひとつは、庭に飛んで来る鴨ひよわりについて。この鴨は何年かわが家の庭を訪れているらしく、妻が柿の実やら蜜柑やらを出してやらずにいるとギャーギャーと悪声で啼いて催促する。妻が「はい、はい」と応えているうちにこの個体はいやに大きくなり、腹部はゴルフボールを呑んだかのようにふくらんだ。

ここで問題になるのは、糞である。いつもは合金製の物干し竿の一角に止まってやらかすのだが、今年の問題行動をするようになった。妻がタオル、バスタオル類を干しておく、竿のその部分の上に止まってやらかすようになったので、せっかく妻の洗った洗濯物が汚されてしまうのだ。

今年の冬は例年になく寒さなので、鴨も冷えきった合金製の物干し竿では足が凍えてしまい、タオルやバスタオルの感触を好むようになったようだ。

天皇が昭和五十八年（一九八三）六月から二

*

年四月月間、イギリスのオックスフォード大学に留学したことはよく知られている。研究テーマはテムズ川の水運であり、まだ皇太子だった天皇が帰国してまもなく、当時『週刊文春』の記者だった私はその論文を入手して誌上で紹介させていただいたことがあった。

そんな思い出があるため、この一月に文藝春秋から寄贈された徳本栄一郎の新刊書『エンペラー・ファイル』はすぐに読んだ。すると、へえ！と驚く一節に出会った。

天皇が帰国して三年後、やはりオックスフォードへ留学した外務省職員がいた。同職員は天皇の回顧録『テムズとともに』を読んで感動。天皇の人となりを知ってもらうため英訳しようとしたが、多忙のため断念せざるを得なかった。この職員が、何と若き日の小和田雅子さん。まことに「事実小説より奇なり」だ。

(作家)



高遠「進徳館の日」のことなど

那須 弘平

この一年間、新型コロナ汚染が拡大する中で息を潜めるような気分でも過ごしてきましたが、

健康面では何の問題もなく、新年を迎えることができました。80歳という区切りの坂も、なんとか乗り切ることができたのではないかと感じております。

2014年（平成26年）秋に「ふるさと大使」を拝命してから、8年目を迎えますが、この間、講演会等で私の考えや意見を御伝えする機会も複数回設けていただきました。特に、平成27年5月、高遠において開かれた「進徳館の日」の催しの中で、旧高遠藩主内藤家ゆかりの方々や伊那市長・教育長をはじめとする市役所関係者、地域在住の皆様を前にして、『内藤の若様』と最後の枢密顧問官・最高裁創設に尽くした二人の高遠人」と題する講演をさせていただきました。私にとつても有意義かつ光栄なことでした（内容については、上伊那郷土研究会「伊那路」第758号（2020年3月）の講演録をご参照下さい）。

今後は、年齢のことも考えて、自ら書いたり話したりするよりも、他の方々のご意見を拝聴する側に廻って見聞を深める方向で、故郷との関りをしばし保って行けたらと願っております。

(弁護士・元最高裁判所判事)



「御恩と御奉公」

西村与志木

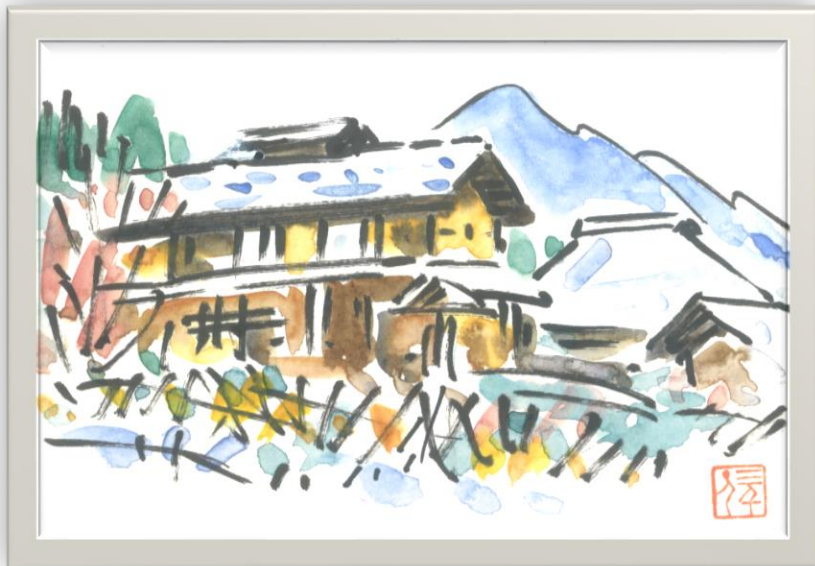
今年のNHK大河ドラマは「鎌倉殿の13人」が続いています。平清盛が権勢を誇った平氏が壇の浦の合戦で滅ぼし源頼朝が鎌倉幕府を開くものの、源氏は三代將軍源実朝で終わり、北条義時が執権として幕府の実権を握るという物語です。この大河ドラマの後半のハイライトは「承久の変」となります。幕府を開いたとはいうものの朝廷の威光はまだまだ強く日本を二分する状態でした。こうした中で朝廷の後鳥羽上皇らは北条義時を討つため兵をあげます。この時の尼將軍と言われた頼朝の未亡人にして義時の姉、北条政子の家臣団（御家人）を前にしての大演説が有名です。「頼朝將軍に対する御恩は山よりも高く、海よりも深い。その恩に報いる思いは浅いはずはなからう。名を惜しむものは三代にわたる將軍の遺跡を守るように。ただし、上皇につきたいものはすぐに申し出よ。」この激に奮起した御家人たちは一気に上皇軍を討ち破ります。「御恩とそれに対する御奉公」という考え方は、その後の日本社会を支配する根底の思想となりました。戦後の高度

成長を支えてきたサラリーマン社会もそうした流れの中にあると言えるのではないのでしょうか。

私の生れた伊那市長谷地区の奥に「浦」という地名の場所があります。雄大な仙丈岳が眼前に広がる標高八〇〇メートルを越える山間なのになぜ「浦」なのでしょう。子供のころに「浦は平家の落人（おちうど）の里だ。だから今も色白の美人が多い」と聞かされてきたことを思い出します。壇の浦から「浦」までの距離はどのくらいになるのでしょうか。壇ノ浦からといわずとも西国から当時の難路を「浦」にたどり着くまでの苦労は計り知れませんが、それに手柄にあずかるうとする鎌倉の御家人たちの追跡も厳しいものがあつたでしょう。

鎌倉時代から連綿と続いてきた「御恩と御奉公」の考え方に支えられた終身雇用型の社会から、アメリカ型の条件が良ければどんどん転職していくという考え方に変わっていかうとしていきます。日本がこれから迎える未来はこれまでになかったものになるかもしれません。

(元NHKプロデューサー)



伊藤三千人「伊那の農家」

僕は友だちを助けたいだけなんだ

野溝 友也

「野溝さん、コンゴ好きですか?」。それは友人で作家の唐突な質問から始まった。確かに以前コンゴ川を往き来する巨大船の企画を書いたから、コンゴ民主共和国(旧ザイール)は気になる国のひとつだ。「コンゴの言葉、リンガラ語を習おうと思うんですけど、一緒にどうですか?」と彼女は続けた。希少言語を習うのは人生を豊かにすると聞いたことがある。その翌週、先生となるジャックと会った。コンゴ出身で難民申請者だ。これが、その後長く付き合うことになる奇妙なリンガラ語教室の始まりだった。

ジャックは10年ほど前に政治的理由で祖国を追われ、縁もゆかりもない日本にやってきた。就労資格も得て働いていたが、昨年3月にそれも奪われた。彼には祖国コンゴに両親と弟がいた。だが日本に逃れて数年後、両親は殺害されてしまう。レッスン中に彼の携帯にコンゴから着信があり、弟の生存も確認できないことがわかった。彼の頬を伝う涙。どんな言葉もかけられなかった。気軽な気持ちで、リンガラ語を習おうと決め、出掛けて行ったが、思わず深いところに足を踏み込んだなと感じる。コンゴには帰りたいが、帰ったら命の保証はない…彼は本当に困っていた。僕に何ができるのか、考える日々が続く。

仕事もできない彼の気晴らしにと始めたリンガラ語教室は、ほぼ毎週、都内の公園やカフェ、彼の自宅…それに東京入管の待合室と場所を変えて開かれた。辞書も翻訳アプリもない、手探りのレッスン。1時間続けると先生も生徒もぐったりだ。それでも何度か続けていくと、単語の意味や、時制、複数形、どうやら人称もありそうだと「なんとなく」わかってくる。そんな中で僕が一番知りたかった言葉によりやく出会えた。それは「Oza moninga na ngai」…。

日本は難民認定率が極端に低い国だ。隣に外国人が越してくることも嫌がる。何か問題を起こす

(かもしれない) オーバーステイの外国人は強制退国か収監されて当たり前だと考える人も多い。その気持ちもわかる。でも困っている相手が友だちだったらどう思うだろう。なんとしても手を差し伸べたいと思うのではないだろうか? だからこそ「Oza moninga na ngai」…あなたは私の友だちです。これを、彼の国の言葉で伝えたかったのだ。拙い僕のリンガラ語に、ジャックは深く頷いてくれた。

(テレビディレクター)



東京と伊那を結ぶ文化拠点 LaLaLa IN

橋爪 恵一

未曾有の災害東北大震災から今年は11年。この間日本中世界中で大きな災害が続出。一昨年はコロナが世界中に蔓延し、まだまだ長引く様相だ。地球に変換期が訪れているのだろう。自然災害はどうすることもできない。せめて自分の身は自分で守る精神でやり抜くより仕方なさそうだ。

65歳から吹けるまで吹こうと新たに始めたクラリネットリサイタル。今年は70歳を迎える。どうにか無事に毎年5年間、東京と伊那で開催できたことは、今思うと奇跡的だ。楽器を吹くほどに楽になっていく気がする。リサイタルは今年も11月に予定しており、是非多くの方に聴いていただけたらと思う。後進への指導も充実しているが、年々学生が孫のような年代になって来る。これはこれで自分も若返っていくようで楽しい。

一昨年の春に、叔母が残した西春近の家を皆で使えるよう修復し、現在空き地に音楽スタジオ Artistic Studio LaLaLa INA を準備中だ。今住んでいる立川市柴崎町にある Artistic Studio LaLaLa と東京一伊那を結ぶサテライト的な空間として、皆が集う場所にしたいと思っている。ア

ンサンプルは楽しい。ここで人々が出会い、音楽やアートのを養う場所になってくれればと願う。

我が妻が続けてきた「できることをできるだけプロジェクト」50センチ四方の5×5NEXTパッチワークの布は、被災地である石巻市へ寄贈する運びとなった。音楽とアートが繋げてきた世界中の皆さんの心意気を届けるため、2月2日石巻市に新しく出来た文化ホールまきあーとテラスで、寄贈式&コンサート「地球は円い」を開催。世界46ヶ国から届いた2000枚の布を届けた。これらの布は石巻市長の提案で、各小中高校へ分配し展示してもらうことになった。まだ手元に800枚ほどの布を保管している。今後この布を生かして海辺に龍のモニュメントを作る計画だ。布は貸し出しもしているので、問い合わせしてほしい。
*石巻2000枚パッチワーク寄贈「地球は円い」コンサートの様子

<https://youtu.be/fpTtryImoxw>

LaLaLa INA は、4月20日にオープンするため準備中。ゴールデンウィーク4月29日から5月5日まで、橋爪が交流してきた音楽家（ジャズサックス中村誠一、オペラシアターこんにゃく座等）のコンサートや、アーティストの作品展など開催予定。東京と伊那を結ぶ文化拠点として、今後はさまざまな情報を発信し、心地良く過ごせる場を提供したい。皆さん、是非遊びに来てください。情報はこちらでチェックお願いいたします。
<http://blog.livedoor.jp/lalala55next/>



2月2日石巻まきあーとテラスにて



西春近に準備中の Artistic Studio LaLaLa INA

(クラリネット奏者)

迷路のような売り場

原 克

哲学者ミシェル・フーコーは、まなざしは権力である、と言った。

パリの凱旋門が良い例だ。

ヨーロッパの古都では、権力の大使館から直線の大通りが放射状に伸びている。

こうした大通りをラテン語で「ヴィスタ(vista)」という。「ヴィジョン(vision)」(視野・視界)の関連語だ。

もちろん、ここでいう視野というのは、道行く市民や観光客の視界のことではない。

あくまでもそれは、王の視野のことであり、王の視界をさまたげない構造の謂でしかない。

つまり、大通りがまっすぐなのは、市民生活の便を図ってのことなどではなく、あくまでも、王のまなざしを、さえぎることがないようにするためだ。

なぜなら、王のまなざしとは、王の支配権行使の換喩かんゆに他ならないからである。

権力は見えないものを怖がるものだ。

遊歩の哲学者 W・ベンヤミンは、「隠れ処」を好んだ。

ベルリンの幼年時代、机の下や扉の影に隠れるのが好きだった。そこにしゃがんで息を止めると、目の前にある「物(Stoff)」の世界に呑みこまれる思いがしたという。

厳格な父や、世話好きな母のまなざしから、いっとき逃れる。口やかましい教師や、いじめっ子の視界から、ほんの少しのあいだ消える。

膝をかかえて、机の脚のキズを見つめたり、扉の木目を目で追ったり。誰のまなざしにも煩わされずに、小さく、狭い物の世界にしゃがんでいる。

そのとき少年は、あらゆる権力から自由な、自分の領域に逃げこんでいたのである。

だが少年は知っていた。そんな隠れ処もはかなくて、永遠に続くものではないことを。でも、だからこそ、そのかりそめの隠れ処は、少年にとつ

て宝物でもあり、樂園でもあったろう。

昨年暮れ知らせを聞いた。

伊那市の通り町商店街にあった N デパートの取り壊し工事が、始まったという。

少年時代 N デパートといえば、日曜日の午後、一家連れだって出かけた。祝祭空間だった。

ガラス張りの正面入口、フロア中央にある大きな階段、二階の婦人服売り場を素通りし、三階のオモチャ売り場、四階の本屋コーナー。最上階食堂のパフェ、屋上にあるパトカーの乗り物。フェンス越しに見下ろす通り町のアーケード、その先に広がる南アルプスへの眺望。

そこには、すべてが詰まっていた。

なにより好きだったのは、あの売り場の迷路のような、空間の狭さだった。

売り場の先には何があるのか、階段の角を曲がると、どんなものが待っているのか。じつに分かりづらかった。かくれんぼにはもってこいだった。

だから、何も買ってもらえなくても、ただそこに行くだけでワクワクした。

当時は分かるはずもなかったが、今にして思えば理解できる。あの迷路が心地よく、落ち着いた理由が。

あの迷路には、いかなる王のまなざしも存在してはおらず、物の世界に呑みこまれることができる、隠れ処だったのだということが。

よしんば、それがもろく、かりそめのものであったとしても、である。

悲しむことはない。

よしんば建物は消えても、いや、建物が消えるからこそ、あの日の迷路はなお一層、深く、狂おしく、心に刻まれてゆくだろうから。

(早稲田大学教授)

ネイチャーピアノ ～森の湖畔で～

平澤 真希

美しい自然、そしてそこに暮らすあたたかい人々。それが伊那市の最大の魅力だと思います。これまでに何人ものポーランド人アーティスト

を伊那に連れて来ましたが、皆必ずこの美しい景観を褒め称えます。

昨年秋、伊那市千代田湖にてネイチャーピアノで「月の光」「トロイメライ」「水のプレリュード」の3曲を、308キロのグランドピアノを湖畔に設置して、その場で録音&撮影をし、動画を作成いたしました。その美しい千代田湖の魅力をYouTube で是非ご覧ください。伊那市って美しい！と感じていただけるのではないのでしょうか。

収録日の11月18日快晴の早朝、湖は鏡のように森を反映し、どこまでも澄んで美しく、焚き火で暖をとりながらの演奏でした。手もかじかむ寒さです。今になって思えば、よくもそんな悪条件の中で弾いたものです。全く苦にならないのが不思議でした。

雨が一粒降っても風が吹いても、その場での録音はNGですので、収録日に快晴を呼びこむために、「いい子にしていよう」と心がけては…います。1週間前には雨マークだった天気予報も、2日前には有り難いことに快晴マークに変わりました。優秀で気持ちの良いスタッフに恵まれているから出来ることなのです。

元々は捨てられていた赤い小さなピアノを、山へ持って行って音を出したことが、きっかけとなって生まれたこのプロジェクトです。この度、ご賛同いただいた河合楽器製作所さまより、木目調の美しいグランドピアノを寄贈していただきました。

このプロジェクトに関わっていただいた、みな一人一人の共通の思いは、「自然が好き、自然に魅せられている」です。自然にみならい、助け合いながら生かされていることを知る…ただただ心の底から喜びを感じて、自然の大きな懐に抱かれて無条件に楽しいのです。

ネイチャーピアノとは、自然が織りなすハーモニーと呼応して奏でる、その日その時だけのピアノサウンドをいいます。我が郷土の魅力を、音楽を通して違った角度から味わう。コンセプトはまさに自然と音楽の調和です。今後、子供たちともこのような思いを共有していけたら幸いです。私

も自然に学びながら、伊那の魅力を、音を通して世界へ発信し、また、未来の森へ何かしらのお返しができたらと願っています。

笑顔の日々にしたいですね。森に出かけてみましょう！

(ピアニスト)



ネイチャーピアノ

2022年が明けました

三沢 節夫

この年は人類の英知が試される年となる。

全世界のワクチン接種率を高め、脅威あるウイルスを防いで、新型コロナをインフルエンザ以下に抑えることが人類に試されている。

世界では、アフガンでミャンマーで、また中近東で歴史が逆に向かっている。この迷路に足を踏み込んだのは、米大統領のブッシュであった。日本の小泉首相は、ただちに、ブッシュに忠誠を誓った。米軍のアフガンとイラク侵攻に対して、アフガンで砂漠を緑地に変える活動をしていた中村哲医師は、国会の参考人招致の席で、「自衛隊をアフガンに派遣するのは有害無益である」と証言した。自民党議員らは、中村さんに罵声と嘲笑を浴びせた。中村さんは「理不尽な武力行使は敵意を増すだけだ」「早魃と飢餓対策が緊急である」と静かに説いた。どちらが正しかったかは、いま

歴史がはっきりと証明している。

いま、改めて、人類の英知が問われている。この世界を変えるのは、少数の政治家ではなくて、民衆ひとりひとりの結集の力である。

Last year I arrived at the point of 90.
You should exceed this point!

2022年1月4日 三沢節夫様が急逝されました。ご家族のご意向により、三沢節夫様から頂戴した賀状を掲載しております。



脱コロナへの願い

三沢 満



今年は、米国経済、欧州経済は、かなりの成長が見込まれる一方、日本経済は引き続き、低成長と予測される。日本は、2012年に2年を限度で

始めた超金融超緩和策が、今年で10年目となる。国債の日銀買い入れで、市中にあふれたマネーは、消費に向かうことが期待されたが、将来に不安を抱える消費者は、ひたすら貯蓄に励み、その資金は、超低金利の日本を逃れて、金利の高い米国市場に流れ込んでいる。そのため、日本のマネーが米国の経済成長に資する、皮肉な形となっている。

欧米は、今年から超金融緩和策から転換し、金利も上げる。日本も金融政策の出口を探る年となるかどうか。海外に流れた円は、ドル買いとなり、115円近くの円安を生んでいる。ガソリン価格や、輸入食料品の価格が一層上昇し、悪い円安となり、益々消費が落ち込む結果となっている。

日本国の債務が、コロナ対策もあって、1212兆4680億円となり、GDPの2.4倍で、主要先進国の中で最も高い水準となっている。国民一人あたり983万円も借金を背負っている計算となる。国であれ、地方公共団体であれ、企業であれ、個人であれ、借金はいずれ返済されねばならない。この国の借金は、将来の国民に転嫁されることになる。こうした異常な数字に、海外の識者達は、一様に日本の将来を危惧している。そろそろ、日本は、経済政策も金融政策も、正常化に戻す時期に来ているのではないだろうか。

コロナのため、あれほど賑わった日本からのハワイへの観光客も目下ゼロ、ワイキキも閑散としている。ハワイ大学もオンライン授業を始めてもう2年、この春学期もこれを継続する。オンライン授業は、教える方も学生も、その負担は想像以上に大きい。脱コロナの時代が一日も早くやってくることを切望して止まない。日本頑張れ！

(ハワイ大学経営学部大学院教授)



ウイズコロナ、アフターコロナ社会を考える ～伊那市独自のソーシャル・

フォレストリーの応用～

山北 一司

コロナ禍で行動制限される中、この機会にコロナ社会とどう向き合うべきか考えてみたい。

昨年一年間、岐阜県内42市町村(21市19町2村)を季節を変えて車で2巡した。岐阜県は山紫水明といわれるだけあって改めて森林や川が多いと感じる。伊那谷のアルプス級の壮大な山並みとは異なるが、自然が心を癒してくれ包容力を感じる。

岐阜県は、長野県を含め7県と接し、森林率は、81・2%(全国2位、長野県は78・8%・同3位)である。

同じ生活圏であっても、行政が違えばコロナや災害に関する情報に差が生じる。生活圏単位の情報、後段で出てくる社会資本の中に、情報資本として加えたいところ。

ともあれ、コロナ禍で旅行等が制限される中、自分の住んでいる県を回ってみて実に見どころが多いと再認識した次第。自分の住む県市町村の魅力を発見する旅、その情報をストックし、発信する、オール県民がこのことに参加できればそのプロセスで得たものは非常に大きな宝。そのことと新しいウイズコロナ、アフターコロナの社会構築に、森林の多い地域を回って、以前から気になっていた伊那市の取り組みを応用できないか。それは、伊那市の平成28年「ソーシャル・フォレストリー都市」を目指す「伊那市の50年の森林(もり)ビジョン」である。長寿社会の中で15歳の人々が50年後の65歳の一世代で成果を確認できる期間であり、個々人のライフプランニングと結び付けられる。

ビジョンでは、自然環境を国民の生活や企業の経営基盤を支える重要な資本の一つとして捉える「自然資本」を利活用しようというものだ。

伊那市の魅力を活かしつつ、森林を単なる経済価値だけでなく、文化的・防災的・環境的などすべてにおいて伊那市を発展させるために、伊那市の自然を”資本”と捉え、または「自然資本を保全する」ことを考え、50年という時間軸で「社会資本」としての価値を高めて行くことが必要としている。そのためには、森林・林業、市民のすべてが一つとなった社会であることが必要。これは伊那市独自の「社会林業(ソーシャル・フォレストリー)」と考えることが出来るというもの。

SDGsの取組が叫ばれる中で、ビジョンの中の、「50年という時間軸で、森林・林業を考える時代(とき)なのです」という言葉はキラリと輝く。

岐阜県立森林文化アカデミーの開校20周年記念が2021年10月20日に開催され、歴代学長と

知事による記念トークセッションが行われた。その中で涌井史郎現学長（3代目）は、今までの『エゴシステム』から『エコシステム』にするためには、濁点をどのように取ればいいのか、バックキャスト（未来のある時点に目標を設定しておき、そこから振り返って現在すべきことを考える方法）で考える必要があると結んでいる。

コロナ渦でも大学の授業もオンライン配信、コンサートもネット配信、在宅ワークも多くなりネットによる会議などライフスタイルが変容してきた。ウイズコロナ、アフターコロナの50年後の自分自身の姿を、そして環境問題という地球市民規模での姿を個々人が何をすべきか考えるときなのかもしれない。「ソーシャル・フォレストリー」を広めたいですね。

（芸術文化普及研究家・生涯学習上級コーディネーター）



次世代の子供たちへ

由紀さおり

今年もコロナの影を感じながら新しい年を迎える事となりました。

「伊那のあの青空の様にスカッと心が晴れ晴れと」、とはなりません。コロナによって私たちの生活のスタイルが変わり、今までの日常が同じ様に戻るとは考えにくい状況です。

そして今年4月から18歳が大人として認知されることが決まっています。音楽業界の今の若い方々を思うとき、溢れる音の氾濫はその気持ちを爆発させる事がその中心であり、核になっていると思われま。まわりの大人たちが18歳という年齢を意識して、この時点で巣立ちをさせる事を念頭に社会に出るための教育やしつけを考え、身につけさせなくてはならないのでは？と老婆心ながら心配しています。

年末に、私の自宅に宅配の方が来られたのですが、訪ねる家を間違えているようだったので、

インターホン越しに「どこにお届けですか？」と聞いても何も答えず、携帯を押し続け、「私の部屋は〇〇ですよ？」と答えても、「あ、わかりました」とか「すみません、失礼しました」とかの一言もありませんでした。アルバイトの方々も日々大変な仕事とは思いますが、雇う側の教育の必要性は重要度を増していると感じています。

この様な時代の流れを感じ、今日まで私たち姉妹が歌ってきた日本語の歌の数々はこれからの時代を担う世代の方々にどう響くだろうか？と考えさせられる日々です。

一年に一度の訪問ですが、伊那に着くと、空気が違う、空の色が違う、広さが違う等と、私の気分をほっとさせてくれるのです。

迎えてくださる人々の笑顔と温かさ、人懐っこいその表情、ずっとなくならずに、この環境が守られ続けてくれることを願い、また確信できるのです。

SDGsのという言葉も耳になじみ、物を大切にする精神が当たり前になって来ている今、アフターコロナを生き残るには、このあたりなのかしらと年頭に思った次第です。本年もどうぞよろしくおつきあいくださいませ。

（歌手）



伊藤三千人「西駒ヶ岳にて」